



幼なじみは性奴隷

らりま
らりま
らりま!

小説 上田ながの
挿絵 もふりる

立ち読み版

序章

現れたのは、彼女の許嫁!!

006

第一章

お嬢様はマゾなので、私を調教してください

017

第二章

私……マゾなのよ!!

037

第三章

経験は大事ですよ♪

081

第四章

真剣勝負!!

114

第五章

蔑んでくれご主人様♥

163

第六章

みんなのご主人様

209

登場人物紹介

Characters



さおとめ れい 早乙女麗

突如現れた姫子の許嫁。その正体は天ノ宮家を凌ぐ名家・早乙女の嫡男。密かに姫子へ思いを寄せる彰人にとってはライバルなのだが……？



みくも かりん 三雲香凛

姫子の専属メイド。平坦な口調であまり感情を表に出さないため、一見クール美少女だが、よく突拍子もないボケをさらりと言ってるのける。



あまのみや ひめこ 天ノ宮 姫子

名門天ノ宮家のお嬢様。Sッ気が強く、人の上に立つことが大好き。悪戯好きで香凛の胸を触ったり、彰人をからかうのが日課の楽しみ。

やまとがわ あきと 大和川 彰人

姫子と香凛の幼なじみの少年。思い人である姫子と麗の結婚を阻止すべく、彼女を調教することに!?

既に教室に到着していた姫子が香凜に声をかけた。不自然なまでにこちらへは視線を向けてこない。もしかして麗の為なのだろうか？ 実は婚約を姫子も望んでいるのではないか？ 僅かに恐怖も覚えてしまう。

(いや、弱気になってどうする？ し、幸せにするんだろ姫子を！)

自分自身にいい聞かせながら、ロータースイッチを握った。

(い、今からこれを使う……)

考えるだけで顔が赤くなってくる。よく見ると姫子と話す香凜も、心なしか頬を紅潮させているように見えた。

「ね、熱でもあるの香凜？」

「違いますお嬢様。魅力的なお嬢様を見て、はしたない興奮を抑えられないのです」

ナイス言い訳だ香凜！ っ、ナイスなのか？

*

(クラスのみんながいます。お嬢様も……これから、みんなに見られながら私は責められるんですね。ああ、考えただけでも身体が熱くなってくる)

ジワリと下腹部に熱気が広がっていくのを香凜は感じていた。下着を穿いていない尻にじかに伝わってくる椅子の冷たさが、より肉体を火照らせるような気がする。それだけじゃない。みんなの視線——特に背後に座る姫子の視線を感じていると、肉体は更に昂っていた。

誰かに見られると感じてしまう。いつからこんな身体になってしまったのか？正直自分でも覚えていない。だが、原因は分かっている。多分、姫子のせいだろう。幼い頃から香凜はずっと姫子の陰として生きてきた。姫子が太陽であれば香凜は月だ。常に陰から彼女を支えていくというのが、香凜の生き方だった。別にその生き方自体に不満は持っていない。寧ろ姫子と引き合わせてくれた運命というものに感謝しているくらいだ。姫子なしの人生など、今ではもう考えられない。

が、そんな陰に生きていくという生き方が災いしたのか、いつしか気づけば見られるだけで身体が火照るようになっていた。人に見られているだけで、気持ちよくなってしまう。人の視線を感じるだけで陰部が熱くなり、愛液を漏らすような身体になってしまっていた。ただ登校するだけで、我慢できない程に女蜜が溢れ出してしまふ。正直に告白すれば、毎日の様に早朝の生徒会室でオナニーしていた。

そして今日は自慰をしていない。普段以上に肉体は発情している。その身体をこれから大切な幼なじみが責めてくるのだ。想像だけでイッてしまふそうである。ちょうど陰核に当たるように装着させられたローターの感触にうっとりすると香凜は瞳を細めた。

（ああ、申し訳ありませんお嬢様。私はこんなにも変態なのです。ですが、これもお嬢様の為。お許しください。それに……仕方がないのです……私だって彰人様のことを……はしたない私をお許しください……）

チラリと彰人の姿を横目で捉えつつ、姫子に対して心の中で謝罪をしていると、ガラリ

ツとドアを開けて教師が教室内に入ってきた。

*

(今だ！)

教師が入ってくると同時に、ローターのスイッチを入れる。

「ああっ」

途端に香凜が声を上げた。ビクリッと彼女は身体を震わせる。これに気づいた何人かの生徒達が一齐に生徒会長へと視線を向けた。その視線を確認すると共にスイッチを切る。

『然るべきタイミ^{しが}ングでスイッチを入れ、必要ないと思つたら切る。ただスイッチを入れっぱなしでは駄目ですよ』

という香凜からの教えを思い出しながらの行為だった。

「ちよ、ちよつと……大丈夫？」

何が起きたのか分からない姫子が心配そうに香凜に尋ねる。

「だ、大丈夫です……き、起立」

これに答えながら香凜は号令をかけた。一齐にクラスメート達は立ち上がる。

「れ——いひっ」

起立の次は礼なのだが、この瞬間を見逃さずにもう一度スイッチをオンにした。しかも今回は一瞬で終わらせたりしない。

「んあつ、はっ……んっんっんっんっ……」

普段冷静な幼なじみが、立ち上がったまま顔を真っ赤に染め、必死に歯を食いしばって漏れ出そうとする嬌声を抑えようとしているのが分かった。

(ほんとだ。本当にみんなに見られて感じてるんだ)

初めて見る幼なじみの姿に興奮を隠しきれない。

「ど、どうかしたのか三雲？」

教師も普段の彼女とは違う姿に心配しているようだった。

「な、なんでもありません……。ハアハアハア……。ち、着席……」

荒い息を吐きながら香凜は言葉を絞り出す。これに応じて全員が腰を下ろした。

(さあ、ここからだ香凜。俺はここで君をしつかり墮として見せる)

こうして香凜にとつて長い授業が幕を開けた。

*

「ハアハアハアハア……。んひっ、あっあっ……。んくう……。ふーふーふー」

必死に香凜は漏れ出そうになる嬌声を抑え込む。

ヴィイインッ!

ローターの稼働音がはつきりと香凜には聞こえる。これほどの音だ、他の誰かにも聞こえてしまっているのではないだろうか？ 考えるところだけでより肉体は火照ってしまう。

(聞かれる。お嬢様にもし聞かれたら……。い、一緒にいられなくなってしまいます。駄目。

そ、それだけは駄目です。ああ、でも、ど、どうにもできない。あ、ま、また強くなるっ!)

彰人の責めはどこまでも執拗だった。ただローターのスイッチを入れるだけでなく、強弱を使いこなし、香凜に愉悦を与えてくる。こればかりは才能という以外、他にない。

「くひつ……んつくつ……ハアハアハア……」

必死に声だけは抑え込むものの、ビクリビクリッと肉体が震えてしまうのだけはどうしようもない。

「ちよ、ちよつと……本当に大丈夫なの？」

当然背後に座る姫子には気づかれてしまった。

「だ、大丈夫ですよ。な、なんでもありません……」

（ああ、お、お嬢様に見られた。わ、私の痴態をお嬢様に……ああ、だ、駄目。こ、これだけで来ちゃう。い、イッチャウ……）

姫子に見られていると考えるだけで、肉体はより激しく火照りだす。我慢などできなかつた。押し寄せてくる絶頂感に香凜は身を任せようとする。

が――。

（あ、と、止まった。止まってしまいました……）

達しようとする直前、彰人によってローターのスイッチが切られてしまった。

*

スイッチを切った途端、すがるような視線を香凜が向けてきた。普段は切れ長のクールな瞳が、捨てられた子犬の様になっている。何だか可哀想にすら思えてくる姿だ。

(でも駄目だ。まだこれくらいじゃ駄目なんだ)

簡単にイカせるわけにはいかない。

『調教というのは相手を快楽で屈服させることです。相手が本当に心から彰人様に折れ、イカせてくださいと願い、すがりつくまで焦らさなければなりません。それが調教というものです』

確かにそれくらいでないと、姫子を性奴隷にするなんて夢のまた夢だ。彰人は心を鬼にして、しばらく間を置いた後、再びローターのスイッチを入れた。

*

ヴィイインッ!

(ま、またっ! あっ、こ、今度は強い! ひんんん)

責めは断続的に続く。絶頂しそうな程に与えられる快楽。が、達する直前で刺激は必ず止められた。その後、しばらく間を置いた後に、再び肉体を襲ってくる。

(だ、駄目です……こ、こんなおかしくなってしまいます……)

授業内容などほとんど耳に入ってこない。下腹部から全身に広がる熱気に、心と身体が蕩かされていくようだった。

下着を穿いていない膣口からは、ジュワリッと愛液が溢れ出し、椅子を濡らしていく。生温かな液体が尻全体を湿らせているのがよく分かった。もし今立ち上がれば、椅子と尻の間に幾本ものねっとりとした糸が伸びることだろう。

(また止まって……。こんな耐えられません。イキたいです。私……。イキたい……)

自然と腰が前後に揺れる。ギシッギシッと椅子が軋んだ音を奏でた。身体中が熱くなる。愉悦が全身を包んだ。我慢ができず、自ら乳房に手を伸ばし、柔肉を制服の上から揉みしだいてしまう。乳房に食い込む指。制服に皺が寄った。

「ハアッハアッハアッ」

頬を赤く染めながら、何度も荒い吐息を吐く。この異変に何人かのクラスメートが気づき、チラチラと視線を向けてきた。

(見られてます。このまま気づかれてしまったら、が、学校にいられなくなって……。ま、またあ)

ヴィイイインッ!

「はんっ」

唐突な責めに、声を抑えることができない。一斉にみんなの視線が自分へと集まる。

「や、やっぱり具合悪いんじゃないのか?」

教師が心配そうに尋ねてきた。

(駄目、そ、そんなに見られたら……。が、我慢できなくなってしまいます……。でも、き、気づかれたら、こ、ここにはいられなくなってしまう……。)

それだけは避けなければならない。

「べ、別になん……。ハアハア……。でもありま、せ……。ん」



教師の許可が下りると共に、姫子が香凜を立たせる。ニチャツと椅子と尻が離れ、思つた通り糸が伸びた。

「お、お嬢様？ わ、私はだいじょう——」

「大丈夫には見えないの！ 行くわよ。あと……彰人も手伝いなさい」

「わ、分かった」

指名された彰人も立ち上がる。

「ちよ、ちよつと待った。そいつが行くならボクが」

慌てたように麗も立ち上がろうとするが、

「私達だけで大丈夫ですから。早乙女様は待っていてください」

と妙に迫力がある姫子の言葉によつて、麗がそれ以上食い下がってくることはなかった。本気で香凜のことを心配していることが麗にも伝わつたらしい。

正直その気持ちは嬉しいのだが、姫子の心遣いを素直に受け止められる程の余裕は今の香凜にはなかった。

姫子、彰人に支えられながら教室を出た後も、肉体は疼き続けている。

（イキたい。お、お嬢様に見られながらイッてしまいたい……）

本能を抑えることができない。

*

（見てる。香凜が俺を見てる……。あの目……）

「そうよ。だって、あんたと香凛って好き合っているんでしょ？ だから……」

「は——はあ!!」

それはあまりに想定外な答えだった。思わず声を上げてしまう。

「私がいたら二人の邪魔になるじゃない。だから……。す、好きなんでしょ？ 香凛のことが好きなんでしょ!!」

まったく想像もしていない理由——。

「違うっ!!」

我慢できなかつた。確かに香凛のことは好きだ。けれどもっと好きなのは……。

部屋中に響くような声を上げる。

「な、何よっ!!」

流石の姫子もこれには驚いたような表情を浮かべた。

「違うんだ……俺が、俺が本当に好きなのは……姫子なんだよっ!!」

ぶぢっ！ ぶぢぶぢぶぢいいいっ!!

「ひぎっ！ あっ、あっあっあっ……い、イッぐ、こ、これ、イッぐのおお♥」

告白と同時に、肉棒を一気に子宮口に届くまで叩き込む。何の躊躇も容赦もなしに処女膜を破ると、それだけで姫子は達した。結合部から破瓜の血が一筋流れ落ちていく。ギューッと膣壁が収縮し、ペニスを圧迫した。

「くうっ！」

びゅぶつ！ どびゆるつ！ びゅぶるるるうっ!!

「うひっ♥ あ、あつつい、熱いのきたっ!! あ、イッく、また、またああ♥」

限界近くまで興奮していたペニスは、すぐに射精を始める。ドプドプと子宮を白濁液が満たしていった。

「あ、へああああ……ハアハアハア……う、うそ、嘘れしょ？ あ、きとが……わ、私のことを好きだなんて……」

「嘘じゃない。こんな嘘つかない。証明してやるよ。これから……俺がどれだけ姫子のことが好きかって!」

「——え？ く、ひあつ！ ちょ、い、今は、今は動いたら、動いたららめえ♥」

破瓜を迎えたばかり膺を、射精を終えて尚萎えることがない肉棒で犯す。未だ膺はペニスに慣れていない状況であり、それ故に姫子が感じる快楽はより大きなものになっている様子だった。

じゅばんっじゅばんっじゅばんっ!

腰と腰をぶつけ合うと、汗が飛び散り、体液が混ざり合う。同時に腕を振り上げ、バチバチと尻を何度も叩いた。

「ひっあ！ そつれ、それすごい♥ それ感じすぎちゃうの♥ だ、だから、だつめ、お願い。やめて！ すごすぎるからあ」

「すごすぎる？ 気持ちがいいんだろ？ だったらもつと感じさせてやる」

子宮口に肉先を押し付けながら、背後から乳首を摘んで引つ張る。

「と、取れちゃう！ そんなにされたらおっぱいが取れる♥ あっあっあっ！ い、イック！ またイツちゃう!! ひ、姫子イクの我慢できなくなっちゃうのお」

肉悦への溺れを姫子は口に出した。絶頂に向かって膣道が痙攣を繰り返す。だが、そこで彰人は一度腰の動きを止めた。乳首を摘み、尻を叩く手までも止める。当然増幅していた快楽も止まり、戸惑いの視線を向けてくる。

「ど、どうして？ な、なんで止めるの？」

この問いかけには応えない。黙ったまましばらくそのまま静止し続ける。

「ちよ、どうしたのって聞いて——あっ！ あっあっああああ」

流石に我慢ならなくなった姫子が声を荒らげるのを見計らい、ピストンを再開した。

(ここだ！)

じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！

「こ、こんない、いきなり、なんてえ♥」

抗議の言葉など一瞬で吹き飛ばす。すぐに愉悦に蕩けた悲鳴を上げ始めた。当然昂りに昇った肉体はすぐさま絶頂に向かっていく。それを証明するように、肉棒への締め付けは先程まで以上だった。

肉茎だけでなく、全身が姫子に包まれているような気さえする。このまま快楽に溺れ、愛しい子に精を注ぎ込みたいと思う。

「あつ、くつる！ 今度こそ来るのお♥ イク！ イカされる……彰人なんかイカされちゃう!! 彰人なんかなのに……気持ちいい♥ 気持ちいいのお♥」

悦楽を覚えているのは姫子も同じようだった。瑞々しい肢体は絶頂へと上り詰めていく。「えっ？ ま、また!!? なんで？ ど、どうしてよ!!」

そこで再びピストンと平手打ちを止める。またしても行われた焦らしに、戸惑いばかりが姫子の顔に浮かぶ。

「イキたい？」

そんな彼女に真つ直ぐ問いかける。

「い……イキたいわよ……」

すると珍しく幼なじみは素直に頷いた。それだけ肉体は昂っているのだろう。

「じゃあ、早乙女との婚約を破棄してくれ……」

「そ、それは……」

言葉に詰まる。返事は戻ってこない。

「俺は姫子が好きだ。この気持ちは本当だ！ 本当に好きなんだ。だから早乙女に渡したくないんだ!!」

必死に訴えかける。自分が本当に好きなのは姫子。ならば婚約を続ける理由はもうないはずではないか！ けれど幼なじみは躊躇いの表情を見せる。ある程度想像できる反応だった。もともと姫子は意地っ張りな上に負けず嫌いでもある、一度決めたことを簡単に覆

することはできないのだろう。

「……必ず姫子に、ここで婚約を破棄させてみせるからな」

「そ、そんなこと……あ、彰人にできるわけ——んくあああつ」

いつもの強気な言葉を中絶させるように、動きを再開する。尻、乳房への責めは勿論、今度は手を陰核にまで伸ばした。女性はどの部位をどの様に弄られれば感じるのかということとは、買ひ物の後に香凜からレクチャーを受けている。その知識を思い出しながら、陰核を摘み、弾いた。

「く、くつり！ そ、そんなとつこ、触られたら、す、すぐにきちやう♥」

敏感部に刺激を与えられ、姫子はすぐに悲鳴を上げるのだが、彰人はそれを聞くなり動きを止めた。

「あ、ま、またあ」

絶望的な表情を幼なじみは浮かべる。自然とお嬢様は自ら腰を振り出しましたが、四つん這い体勢ではなかなか思うようにいかない様子だった。

「お、奥に当てないでえ」

そして再開。後に——。

「う、動きなさいよお」

停止。

それを何度も何度も繰り返す。悦楽によって熟れに熟れた肉体をひたすら焦らし続けた。

「あ……お、おねがい……い、イカせて……イカせてよ彰人お……おねがいからあ……」
遂には咽び泣きながら懇願までしてくる。

「俺が姫子を幸せにしてみせる。だから……どうすればいい分かるよな？」

「れ、れもしよればあ……」

それでも未だに婚約破棄を受け入れない。この辺りの意地っ張りぶりは筋金入りだ。けれど、そこが姫子らしくて嬉しくなってくる。同時に悲しくもあった。

「俺はさ……本当に姫子のが好きなんだ。だから、姫子と一緒にいたいんだよ。姫子と離ればなれになりたくない。確かに今の俺じゃ姫子には相応しくないかもしれない。でも、絶対にお前の隣に立てる男になってみせるから!!」

どんな壁だつて乗り越えてみせる——と心の底から語りかける。

「あ、彰人……」

四つん這いのまま姫子が振り返った。目と目が合う。そのままゆっくりと顔を近づけると、彼女の唇にキスをした。ちゅくつと柔らかな感触が伝わってくる。触れ合うだけのキス。すぐに彰人は唇を離した。

「姫子は俺のものだ」

はつきりと幼なじみに告げる。姫子は一瞬瞳を見開いた後、ぼろぼろと涙をこぼした。

「……わ、分かったわよ。そ、そんなにいうなら……わ、私を自分のモノにしたいのなら……ちゃんと私を満足させてみせないさいよ!!」

それでもまだ姫子は強がる。本当にどこまでも意地っ張りだ。

「分かってる」

答えてもう一度キスをする。今度は舌と舌を絡み合わせるキスだった。

じゅるっ、びぶじゅぐるっ、ちゅぶっちゅぶっちゅぶっ……。

「んっ、ふちゅ……んちゅう……んふあっ！ ひっ！ あ、当たる！ それ子宮に当たる

うっ♥ バシンバシンッておしり叩かれると、オマ○コに響くのお♥ いいっ！ いいの

っ!! それすごく気持ちがいいのお♥ あっあっあっあっ!!」

もはや我慢などできはしない。唇を重ね合わせながら腰を振り、何度も膣奥に叩きつける。溢れ出す愛液により濡れた手で尻を叩くと、バッチュンバッチュン淫らな水音が響き渡った。刺激を与えるたびに、結合部からはより多量の愛液が溢れ出す。

「い、イク！ 今度こそイク！ イクの!! 姫子イクのお♥」

絶頂を止めるものは何もない。これまで以上の勢いで子宮にペニスを叩きつけた。

「射精すぞ！ 姫子の膣中に射精すからなっ!!」

限界を告げるように肉棒は膨張していく。肉茎には幾本もの血管が浮かび上がる。内側からは、姫子を焼き尽くしてしまうのではないかというくらいの熱気が溢れ出した。

「あ、熱いの！ 彰人の……ご主人様のチンポすごく熱いのお♥ だ、射精して！ 姫子

の膣中に沢山せーし射精して……あっあっあっ……姫子を孕ませてえ♥」

ばちゅんっばちゅんばちゅんっ！

腰と腰が何度もぶつかる。肉壁の一枚一枚が勃起棒に絡みついた。膨れ上がった亀頭が肉壁を摩擦する。そして――。

「くっ！ で、射精るっ!!」

じゅずつとこれまで以上の勢いと深さで蜜壺に肉棒を叩きつけた。

どびゅっ！ びゅっびゅっびゅっびゅっ、どっびゅるるうっ!!

「んひいっ!! あ、で、でってる！ 熱いのが私の膣中にで、射精て――い、イック！ イクイクイクイク、姫子イッちやうのおお♡」

子種で陰部を満たされた姫子は、愉悦の頂に達した。白濁液を放つ肉棒を締め上げながら、背中をキュウツと弓形に反らす。瞳は白目を剥き、遂には――。

じよばっ、じよばばあっ！

「あ、で、でってる！ お、おしっこ、やだ……おしっこでひゃってるう♡ やらあ、止められない。止められないのお♡」

強すぎる快楽によって全身から力が抜けてしまったのか、失禁までしていた。アンモニア臭を伴った生温かな液体が床一面に広がっていく。

「ああ、みないれ……お願い……は、恥ずかしいから……」

顔を真っ赤にして快楽に痙攣しつつ失禁を続ける姫子の姿が、彰人には本当に愛おしく見えた。

「おしっこまで漏らして……本当にはしたないね。でも、そんな姫子が大好きだよ」



もう一度気持ち伝え、キスをする。舌と舌を絡め合うキス。

「んちゅっ、じゅるるる、じゅちゅるるう」

何度も幼なじみは積極的に舌を絡めてきた。ツプツと唇を離すと、唾液の糸が妖艶に伸びる。

「あ……わ、私も……わたしも本当は……本当はしゅき……彰人のことがしゅきなのお……
……だから、らから一緒にはいられなかったの……。らって香凛と彰人が好き合っていると
思ってたから……だから、だから……」

そのまま見つめ合っていると、やがて姫子は口を開いた。

好きだったから、だからこそ一緒にいられない。一緒にいるのが辛いから——初めて姫子が伝えてくれる素直な言葉だった。

「嬉しいの……彰人に好きってしてもらえるのが嬉しい。胸が温かくなってくるの。彰人と一緒にいるだけで、身体がぼかぼかしてくるの。好き。彰人のことが大好き。愛してる……だから、わ、私を……私を離さないで……お願い。ずっと私の側にいて！」

いうなり自らキスをしてくる。再び唇を重ね合わせ、互いの口腔を貪り合った。

「ああ、ずっと側にいる。姫子はもう俺のモノだ！ 絶対に離さない！ 今日には姫子が孕むまで犯してやるからな!!」

ストレートに気持ちぶつける。

「はい♥ 犯して……犯して犯して、孕ませてください♥ ご主人様♥」

「き、きにしにやいれくらはい……」

その生徒に対して二人は笑って見せるが、どちらの笑みも愉悅に塗れていた。

*

「じゃあ、これを掃除するんだ麗」

射精を終えて尚勃起し続ける肉棒は、愛液と精液でぐちゃぐちゃになっている。それを麗に向かって突き出した。

「あ、は、はい♥」

これに今まで散々お預けを食らってきた麗が、これ以上ないくらいに嬉しそうな笑みで頷くと、彰人のズボンを脱がし、下半身を剥き出しにすると、何の躊躇もなしに肉棒を口で啜ってきた。

ぐじゅっ、じゅるるるるう……。

「あ、お、おいひ……んじゅっ……ああ、セーシの味がして、す、すごく、おいひい……」
ペニスを啜えてうっとりとしながら、舌を動かし始める。じゅぼじゅぼとはしたくない音が響いてしまうこと、唇を突き出したタコのような情けない表情を浮かべることになってしまうことも気にせず、男装令嬢はひたすら口奉仕に励んだ。

絡みつくような舌の動きが、射精を終えたばかりの肉棒に絡みつく。

「まったく酷い姿だな。男のものにこんながつついて……。最低な姿だ。今の早乙女を見たら、誰だつて軽蔑するぞ」

「しょ、しょんなころいうなあ♥ んじゅっ、んじゅっ、んじゅっ……おいひい。ああ、なんれら？ ろうひてこんなにおいひいんら？」

侮蔑の言葉を向けると、それだけで麗は身を震わし、肉棒への吸いつきも激しいものにしてきた。が、これだけでは物足りない。

彰人はその場に仰向けに横になった。屹立する肉棒だけが天井を向く。当然巨棒には麗が奉仕を続けたままだ。

「香凜も来るんだ。二人で奉仕するんだ」

「は、はい……」

命を下すと、絶頂後の余韻に浸っていた香凜が素直に頷き、麗がペニスを啜える股間部へと顔を近づけてきた。男装少女はこれに気が付くと一旦肉棒を口腔から離す。二人の鼻息が肉茎にかかり、ゾクリとした刺激が走った。

「んちゅ、ふっ……んちゅっんちゅっんちゅっ……」

「はむ……ちゅぱっ、くちゅあばああ……」

二人が同時に舌先をペニスに這わせてきた。

（香凜と麗が俺のを舐めてる……）

現実とは思えないような光景に、彰人も「はあっ」と感嘆の息を漏らす。しかし、これだけでは終わらない。

「口だけじゃ駄目だ。その胸を使って奉仕するんだ」

「胸……ご主人様は本当に変態だな」

「麗様と一緒に彰人様にご奉仕できるなんて幸せです」

この命令に従い、麗の胸が肉棒を挟む。香凜はメイド服の胸元部分を露わにすると、麗とは反対側から乳房を押し付けてきた。

「くっ、す、す……」

二人の美巨乳が同時に肉棒を押し潰す。乳房にペニスが食べられてしまうのではないか？ などという錯覚に陥った。二つの巨乳に肉棒が溶かされてしまいそうにさえ感じる。潰れ、形を変える柔肉が艶めかしい。吸い付くような肉の感触が心地いい。

「熱い。チンポでおっぱいが火傷しそうだ。そんなにボクのおっぱいがいいの？」

「わ、私の方がいいですよね彰人様？ んあああつ！ こ、擦れます。麗様の乳首が擦れて……あつあつあつ」

じゅずっじゅずっじゅずっ！

二人は互いに張り合うようにしながら、同時に上半身全体を使って肉棒を摩擦する。乳房と肉棒、乳房と乳房が擦れ合う感触に、少女達の口からは甘い吐息が漏れ出した。

「わ、私も！ 私もしたい。私も彰人をあ……愛したい！」

この状況に、姫子が恥じらいつつも声を上げる。姫子に愛したいといわれ、ドキッと胸が熱く鼓動した。

「ひ、姫子は俺の顔を跨いでしゃがむんだ」

「は、はあっ!! な、何言ってるのよ……そ、そんなこと……」

「できるよな？」

目を見て命じる。

「う、うん……」

昔からの立場は完全に逆転していた。命令に逆らうことができない姫子は、素直に頷きながら彰人の顔を跨ぐ。眼前に広がったままの花弁が晒された。そのままゆっくりしゃがみ込んでくる。ムワツとしたチーズを思わせる発情臭が広がった。匂いを嗅ぐだけで、より肉棒が硬くなる。

「す、すごい。こ、こんなに大きくなった。姫子のでこんなに……」

「硬い。すごく硬いです。くっ！ ひっひっひん。わ、私たちのおっぱいよりもお嬢様のマ○コの方がいいのですか？」

膨張したペニスにパイズリをする二人が対抗心を燃やす。

じゅちゅっじゅちゅっじゅちゅっじゅちゅっ！

柔らかな乳房による奉仕の激しさが増した。ただ胸で扱くだけではない。谷間から顔を出す肉先に二人は舌まで添え始める。チュパチュパ音を立てて、何度も吸引してきた。

その快楽を味わいつつ、目の前の花卉に手を伸ばす。指で摘むのはクリトリス。

「んっ」

触れるだけで姫子は全身を震わせた。そのまま陰核を捻り上げる。



「ひっ♥ くひいいい♥」

びゅばっ！ びゅばあああつっ！

ただそれだけで、姫子は潮を吹いた。彰人の顔が愛液で濡れる。

(感じてる。姫子が感じてる！)

素直にそれが嬉しかった。だから何度も何度も繰り返し、陰核に対する愛撫を続けた。それだけでなく、膣中にも指を突き込み、乱暴に挿入する。

じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！

「や、やめてよ♥ そ、そんなの、そんなのま、またい、イッちやうから、やめ、やめて！ あっあっあっあっ、く、くる、来るのお♥」

再びの絶頂感を姫子へと与えた。が、達する前に指の動きを止める。

「な、なんれ？ どうして止めるのよお」

今にも泣きだしそうな声で姫子は叫ぶ。そこで再び指を動かし始めた。

「まった、またあ♥ ひっ、とま、また止まった。やだ、やだあ」

もう一度絶頂近くまで姫子を昂らせるが、やはり寸止めをする。その行為をひたすら繰り返した。

「やら、お、おかしくなる。おがしくなるのお……。イカせて、姫子をイカせてよお♥」
幼なじみお嬢様が嘆く。

「まったくご主人様は酷い奴だな。でも、そんなところが堪らない。好きだ。ご主人様の

ことが好きだ♥ もう我慢できない。ず、ずっとお預けだったんだ。も、もういいだろ？」
この二人のやり取りに、麗が限界を迎えた。男装少女は自らズボンを脱ぐと、香凜を押し
のけ彰人の身体に跨がり、そのまま挿入を開始した。

じゅずつ！ ぐじゅじゅじゅじゅずるるう。

「き、きた……ぼ、ボクの膣中にご主人様のチンポきたあ♥ ひっひっひっひぐう♥」

挿入だけでガクガクと麗は全身を震わせ、達する。

「き、昨日に続いてまた自分で挿入れるなんて……ハアハア……本当に麗は淫乱だな」

「ご、ごめんなさいご主人様♥ でも、ボクは本当に淫乱なんだ。だ、だから、我慢でき
ないんだ。だから、もつと、もつとお♥」

じゅちゅつ、ぐちゅつ、じゅずるるう。

自ら麗は腰を振り始める。もつと感じたい。肉体を貪ってもらいたい——本能の赴くま
まの動きだった。

「いやらしいです麗様。んちゅつ……ちゅつちゅつちゅつちゅ……」

香凜はそんな麗の動きをうっとりで見つめながら、彰人の太股にキスをしてくる。それ
だけでは終わらず、舌を伸ばし、下半身全体を舐め回してきた。膝、脛、靴を脱がし足の
指一本一本にまで舌を這わせてくる。生暖かい口腔の感触が心地いい。

肉棒や下半身に蕩けそうな程の奉仕を受けながら、姫子に対する寸止めを続ける。

「ふひっ！ あ……あんん……あっあっあっ……も、もうらめなの……お、お願い、こ、

今度、今度こそイカせて……死んじやうから。このままじゃ姫子死んじやうからあ♥おねがいらから、イカせてえ♥」

指に絡みつく愛液は糸を引く程に濃厚となり、白く濁っていた。少し指を動かすだけで、ニチャニチャという水音を奏でる。摘まれたクリトリスも親指程の大きさになるまで膨れ上がり、ビクビクと己の存在を誇示してきた。言葉だけではなく、肉体全体で絶頂を姫子は求めている。

だが、まだ彼女をイカせるようなことはしない。もつと彼女の身体を焦らし、昂らせたかった。だから絶頂直前でまたも愛撫を中断する。

「なんれ？ ろうしてらの？ イカせてよ！ わらひをイカせなさいよお！」
お嬢様は咽び泣く。

「すっごい！ また、また大きくなる♥ ボクの膣中でまたご主人様のチンポが大きくなる♥ こ、こんなの無理だ♥ 耐えられないよ！ イク！ イカされる♥ ご主人様にイカされちゃうよ!! ひっひっひいひい♥」

それとは対照的に自ら腰を振る麗は、ペニスで膣奥を掻き混ぜられながら、絶頂に至った。半分白目を剥き、舌をだらっと伸ばしたアへ顔を晒す。早乙女グループの跡継ぎが晒している顔ではなかった。あまりに無様で、淫らで、美しい顔。

「もつろ、まら、まらイギたいろお♥ もつろいかへて、ボクをいかへてえ」
それだけの表情と痴態を晒しても、増幅する欲求はまだ抑えられないらしい。麗は達し

つつも、自ら腰を振り続けた。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ!

激しい水音を響かせながら、膣壁で肉棒を締め上げてくる。

「射精して! ボクの膣中にご主人様の子種を射精してえ♥」

射精を求めて腰を振りながら、麗は自らの乳房を自分の手で揉みしだいた。激しい締め上げと、姫子に対して続けた寸止めによる興奮により、我慢できない程に肉棒は硬さと熱気を増す。

「くっ! こ、この変態御曹司め!!」

彰人だつて我慢の限界だつた。麗を罵ると共に、自ら腰を振る。ズンズンッと自分に跨がる男装令嬢を、下から何度も突き上げた。

「ひっ! い、いきなりっ♥ そ、そんないきなりは駄目だあ♥ い、イッちやうから! 耐えられないからあ♥ 届く、お、奥まで届いて…:ボク、ボクうっ♥ んいいいい! イッくうううう♥」

不意を衝くように行われた唐突な突き上げにより、あつという間に麗は再びの絶頂へと押し上げられていく。当然膣壁は引き締まり、それが彰人のペニスも限界に向かわせた。

「で、射精るっ!」

びゅぶばっ! どっびゅるるるっ!!

ポンプの様に脈打ちながら、未だ濃厚で、尋常な量ではない精液を蜜壺へと流し込む。

全身を包み込む解放感が、何よりも心地よかった。

「あ、熱いつ！ あ、止まらない。イクの止まらないんだあ♥」
麗は本当に幸せそうに表情を歪ませる。

*

「あ、しあわへ、あ、ぼきゅ、ぼきゅもうもろれないよお……♥」

白濁液を流し込まれた麗は、足を蟹股に開き、白濁液を垂れ流しながらビクビクと痙攣し続けている。膣口からは白濁液が溢れ出し続けていた。

「お、犯して……。わ、私も犯して……。我慢できないの。おかしくなりそうなの……。イキたいの。彰人に抱かれないのぉ!!」

幸せそうに弛緩する麗を見つめ、限界を姫子が告げる。彰人の顔に腰を押し付けながら、何度も前後に腰を振ってきた。

「マ○コにザーメンいっぱい射精して！ 姫子に彰人の赤ちゃん孕ませてよお。お願い。好きなの……。私……。彰人のことが好きなのよ」

意地っ張りなお嬢様が素直な告白を向けてくる。瞳は潤んでいた。頬は桜色に染まっている。赤ちゃんが欲しい。子供を孕みたい——その表情に嘘はなかった。

「だから抱いて。私を愛してよ……」

眦から涙を零しながら訴えてくる。

そんな顔を見せられて我慢などできるはずがなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断転載は厳禁です。著作権者様の許可なく複製・転載・無断転載は厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!